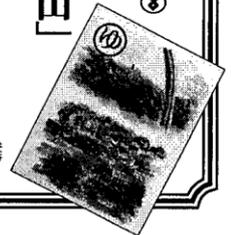


大東ふるさとカルタに見る地域遺産⑧  
「夕立に 虹がかかる」  
飯盛山



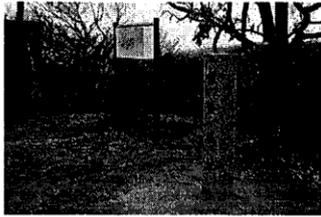
大東市の東部は山間部で、その北側には標高314mの飯盛山があります。生駒山地の北西部部分の支脈で、東は谷によって完全に生駒山地と分離されている状況で、生駒山地の中では半島のような地形をしています。

江戸時代に刊行された名所ガイドブックである「河内名所図会」には、形が飯を盛った形をしているので飯盛山と呼んだ名前の由来や、正平3(1348)年に楠木正行と高師直が戦った四條繩手合戦のことが記されています。

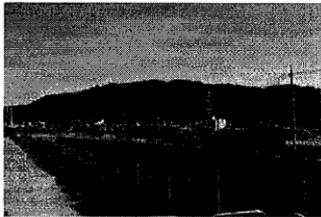
この飯盛山の西麓には、京から河内を抜け高野山に向かう東高野街道や、北側には大坂から奈良へ向かう清滝街道などがあり、要衝の地であったこと

から、戦国時代には南北約1200m、東西約500mの範囲で、大小約70に近い郭を有する飯盛城がありました。

飯盛城が、本格的に整備されたのは、享祿4



山頂に設置された飯盛城の石柱標識と説明板



飯盛山遠景

(1531)年ごろ、河内守護島山氏の家臣であった木沢長政が、細川晴元に味方し、飯盛城に立て籠もって戦っていたことと言われ、その後、三好長慶と晴元が長政を滅ぼした後は、交野の土豪、安見直正が入城した時期もありましたが、永祿3(1560)年には畿内を支配し三好政権を樹立した三好長慶が入城し、この地が政治・経済・文化の中心となりました。

(生涯学習課)

古文書から見える大東の歴史④  
江戸時代の災害と救済

人は生活する中で、しばしば自然災害に見まわれます。特に日本列島は地震の多い地ですから、長い歴史のなかで何度も大きな地震の被害を受けてきました。また、気候の変調による農作物の不作が人々の生活を脅かしました。江戸時代には何度かの地震が起こり、飢饉にあつたりして多大な被害を受けたのでした。しかし、こうした災害に對して人々は助け合うことによつてしのいできたのです。

大東市域においても、江戸時代には何度かの地震に見まわりました。

例えば、嘉永7年(1854)6月14日(実際には15日午前2時ごろ)、近畿地方を襲った大地震は非常に大きなもので、人々を驚かせたようです。

当時の古文書には「前代見(未)聞之大地震」と表現されています。

この地震によつて、深野南新田の弥治兵衛と万兵衛の家が倒壊しました。そこで、信楽代官所(滋賀県甲



3行目に「前代見(未)聞之大地震」と書かれています  
(嘉永7年(1854)6月の大地震)

賀市多羅尾)からその実態調査の役人が派遣されています。また、すぐに復興に向けた活動が進められ、派遣された役人の経費や復興に向けた費用の一部は村で負担されました。

享保17年(1732)に西日本を襲った大飢饉では、多くの被害者が出ましたが、人々は生きるために自発的に困窮した人を助けました。このように、江戸時代にはすでに、困ったときには助け合うという精神が根付いていたようです。

こうした災害と救済を垣間見ることが出来る古文書は、7月31日まで歴史民俗資料館で展示されています。

(市史編纂委員 岡村喜史)